
頼み屋

石山一徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頼み屋

【Nコード】

N1411P

【作者名】

石山一徹

【あらすじ】

とある学校に、変わった二人組がいるその名も「頼み屋」
彼らは、学校生活におけるすべての悩みを解決できる。
ある意味、お助け団である。
この物語は、そんな二人組の活躍を描いたものである。

(前書き)

初めて書いた作品です。

自分なりによく出来たといえるものになったと思っています。

なので、ぜひ最後まで読んでみてください。

意見や指摘など、お待ちしております。

「おい、信二、また頼みたいことあんだけど」

そう言いながら6時間目が終わり、ゆっくりしている信二の前に男が走ってきた。

「なんだよ竜助、またか？」

今返事をしたのが今回の主人公である**的場信二**。まどばしんじ

信二に話をかけたのが、**貴台竜助**。きだいりゅうすけ

二人とも、同じ鰯高校の2年生で、同じクラスメイトであり、幼なじみである。

信二は、昔から人の世話をするのが好きで、中学時代から自分を、

「頼み屋」と名乗り、いろんな依頼を解決してきた。

高校になると事件が増え、竜助をバックアップにおくようになった。美人には弱く、竜助いわく、美人相手に金をとったことがないらしい。

「ああ、また宿題なんだが、」

「分かったよ」

信二はため息をつきながら返事をした。だがそのときふっと黒板の日付を見た。

「今日11月12日じゃん、再来週テストだから休業な」

「なっ、ずるいぞそれ！」

「お前頼みにきてるのにずるいも何もないだろ」

それから少しして、言い返す言葉ないのが

「分かったよ、、」

と言った。

下を向いた竜助の肩を叩いて

「じゃ、一緒に帰って勉強でもしようぜ」

と、なぐさめた。

二人は、そのまま廊下を歩き、階段を下りるところで、声をかけられた。

「あの、すみません、頼み屋の、的場信二さんですよね？」

「はい、そうですけど、、」

声をかけてきたのは、1年と思われる女子である。

身長が155くらいなの、かわいらしい女の子だった。

すぐに信二は惚れてしまった。

それにすぐ気づいた竜助はため息をついた。

「それで、何の依頼ですか？」

「えっと、、なんか最近ストーカーにつけられてるんです」

「ス、ストーカーですか？」

「はい、」

その女子の名前は、山本恵^{やまもとめぐみ}。
1年の後輩で、陸上部の100m選手である。

「おい、何をしている！？」

後ろから歩いてきたのは、清先生である。

「いや、別に依頼を受けていただけです、」

信二が、嫌そうに返事をした。

「ふん、そんなもの、。それより、山本、明日は補習あるからな」

「はい、」

そう言って、去っていった。

暗い空気をなくすため信二が話した。

「とりあえず、詳しく聞きたいので、どっかの喫茶店でも行きませんか？」

「はい、」

「じゃあ、先に行ってください」

「はい、」

そう言うと、山本は走っていった。
見えなくなったと確認してからすぐさま竜助は怒りながら

「お前、なんで彼女の依頼受けてんだよ！」

「ご、ごめん、。でも、なんか心配になっちゃって」

竜助はあきれた顔で

「分かったよ、。確かにあの顔は少しおかしいし、俺の出番らしいしな」

「ああ、頼むよ」

その後すぐに、喫茶店に向かった。

二人がついたときに奥の席に山本の姿があった。
おくれて座り、信二は早速持ち出した。

「で、いつ頃ストーカーにあっていたの聞きたいんですけど」

「あの、その前に、」

山本は、竜助のほう向いた。

竜助は、オレ？とゆう顔をした。

「ああ、こいつはちゃんと理由があっているんです」

少し竜助はお辞儀した。

「それで、いつ頃からあったんです？」

「はい、先週あたりから塾の帰りに、なんか人影を感じて、3回目ぐらいからダッシュで逃げたら走っておってきて、」

「そうですか、そこは暗闇だったんですか？」

「はい、それに周りは静かなのですぐ分かりました」

「最後までついてきましたか？」

「いえ、一度も」

「では、何か相手の特徴を教えてください」

「はい、背丈は180ぐらいで、靴が光っていた感じがします。でも、体はあまり見えなかったので、黒い服をしていたと思います」

「分かりました。竜助どうだ？」

「よし、一人にしぼれたぞ」

得意げに竜助は言った。

「あの、そちらの方はさっきから何をしているんですか？」

今度は竜助が言った

「いや僕は、今の情報からこのパソコンを使って犯人を調べていた

んですよ」

山本は驚いた顔をした。

「そんなことが出来るんですか？」

「はい、学校中の生徒と先生のデータが入っていて条件の時間にそこに居るのが可能なものを調べました。そしたら一人ヒットしました。」

先にその人物を信二は見せてもらった。
それを見て信二は、驚いた。

「誰なんですか？」

「清先生です、」

信二の言葉に、3人とも黙ってしまった。

少ししてから、

「なんで、先生なんですか？」

と山本は聞いた。信二は言い返した。

「僕も最初は驚きましたが、さっきの廊下の話を聞いたら、絶対ないとは言いません」

その後に、竜助が付け足した。

「まあ、それにこの時間、学校関係者で、今の情報だとこの人しかいません。それに、今から見せるプロフィールを見たら疑いが確信に変わると思いますよ」

そう言っつて、竜助は二人に、清先生のプロフィールを見せた。
そこにはこう書かれていた。

『清良和46歳きよよしよしかず誕生日9月4日血液型A型身長182cm体重71キロ。東大を卒業したエリートだが、女子生徒にセクハラ、ストーカーなどしていて、鰯高校は、3回目赶赴した学校である。ストーカーがばれた理由は、パソコンにデータを入れてをり、それが外に流出してしまったからである』

信二は気になっていた廊下の件について聞きだした。

「山本さん、正直に答えてください」

「はい、」

「清先生から、セクハラを受けているんですか？」

山本は、黙ってしまった。

信二は頭に血が上ったのか激昂しながら

「アナタがちゃんと言わないとこっちが困るんですよ!! あいつにセクハラを受けていたんですよ!? なんで、言わないんですか、あいつから逃れるために依頼したんじゃないんですか!!」

と言った。

店内の客が一斉にこっちを見てくる。

信二はすぐに謝った。

山本は当然驚いたが、竜助は驚きと言うより、信二がここまであつくなるのはと、驚いていた。

すこししてから、ついに山本は口を開けた。

「はい、すみません」

「どううことは、ストーカーではなくその時間に、一緒に行動を共にしていたんですね」

「はい」

「どこに行ったかは聞きません。でも、清を許せないんですね？」

「はい」

「分かりました」

信二と山本が話している間に、竜助は、どうやって、清に制裁を下すか考えていた。

そんな竜助に信二は

「お前は考えなくていい。ここからはオレの仕事だ。俺に案がある」と言った。

竜助は驚きながら聞いた。

その作戦はこうだ。

まず、明日清と一緒に、山本に帰ってもらう。

それから変なところに入るところを写真に撮る。

そして、清が外出中に、竜助は清の家に行って、パソコンから、山本に関するデータを消すとゆう作戦だ。

翌日、その作戦を実行に移した。

まず、6時間目が終わり、二人で、山本と清を尾行する。

一度清が家に戻り、その後また二人は歩いていった。

信二は、二人を尾行しながら写真を撮っていた。

竜助は、その間に、清の家に侵入して、データの削除を始めた。

そのなかには、鰯高校のなかでも、約20人くらいの女子生徒のデータがあった。

そのとき、竜助はこの制裁は、この人たちのためだと思った。

そして、個人のファイルのなかには、弱みとなる書類と写真が入っていた。

すべてのデータを復元不可能にして、その場を立ち去った。

そのころ、信二は、最後に二人で、ホテルに入っていく写真を撮って、竜助と合流した。

その後、山本にも連絡し、翌日、放課後、清を呼び出すことに成功した。

「なんだ、三人そろって」

不機嫌そうに、清は言った。

少しはにかみながら、信二は言った。

「先生、昨日先生が、山本と一緒に帰ってるところ見たんですね」

続けて、竜助が言った。

「ついでに、パソコンのなかにあったこのデータ消しときましたよ」

清は驚きが隠せなかった。

そしてつい、

「なっ！？ 貴様かあのデータを消したのは！！」

と言ってしまった。

それを聞きまたはにかみながら

「あれっ、認めるんですか？ 竜助は先生のなんか言ってますんよ？」

今度は、驚きとゆうより、焦りを思わせる顔になった。

そして、竜助がとどめの一撃を食らわせた。

「先生のなんですね。分かりました。じゃ、警察に渡しときます」

すかさず清が

「分かった！ 俺が悪かった！！ だから誰にも言わないでくれ」

と言った。

それに対し信二が冷静に

「じゃあ、被害者のみんなにちゃんと土下座して謝ってください。そして、もうこんなことをしないと書いてください。今度こんなこ

とがあつたら即警察に渡しますからね」

と言った。

「わかった、」

力つきそうな声で清が言った。

その後、全員にちゃんと謝ったが、被害者の一人が警察に訴えて、結局清は捕まった。

それから2週間後、、。

「いやゝ。被害者の子たちからの手紙がヤバイね」

自慢そうに帰り道に竜助が信二に言ってきた。

「なあ、警察に訴えた被害者に画像渡したろ？」

竜助は、ビクっとしながら答えた。

「ああ、。信二は本物見てないから分かんないけど、ひどすぎて、すまん」

「いや、お前を責めるつもりはないんだ。それより、テスト終わったし、どっか行くか！」

「ああ!!」

竜助は元気よく答えた。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回は、長編物を書けたら書きたいと思います。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1411p/>

頼み屋

2010年11月26日04時34分発行